

憶良の述作と敦煌願文

一、はじめに

萬葉作家の中で、数多くの漢文や和歌を残した山上憶良の作品は、幅広い典故の引用及び難渋な表現をもって知られ、現在猶も様々な解釈の可能性を示唆してやまない。憶良の述作には、儒、佛、道の思想は無論のこと、とりわけ佛教が重要な位置を占めているため、これまで注釈する者をして多くの時間を費やさせてきた。にもかかわらず、個々の表現―用語や行文の出典を定めることは決して容易ならず、従来の憶良研究が、その表現をめぐって多くの解釈を示しながら、未だ揺れている説も少なくないのである。

ところで、憶良の作品を出典論的立場から考察する場合、「願文」と称せられる漢籍の一群が注目に値する。所謂願文とは、佛前において叶えたい望みを祈禱するために唱える文章を指し、多くの

場合、その題に「願文」という二文字があることに由来しているが、その定義はおおむね左記のようなものである、

さまざまな佛教法會の場にあつて、主催者（發願者・施主）自身の願意を言い表わす文章であるが、その内容は、自他の死後の冥福（極樂往生）を祈るもの（追善・逆修供養）をはじめ、国家の安泰・五穀豊饒（祈雨）、あるいは自己の息災や近親縁者の長寿を乞う（算賀）といった現世での諸利益を祈願するものまで、実に多岐にわたる。¹⁾

願文は発生源が中国であるが、上代日本にも既にその作成の形跡が認められる。その原形となるものが本来敦煌文献に散在し、調査に難度が伴っていたが、中国の学者によって整理され、『敦煌願文

王 小林

集』と題して十数年前に出版されている。これをきつかけに、『萬葉集』との関係が指摘されるようになり、とりわけ王暁平氏の憶良の述作における願文の影響に関する指摘が、先鞭をつけたものとして注目される。⁽³⁾

ただし、王氏の論考は、願文一般の上代日本文学への影響を中心としているため、文体及び一部表現の類似を指摘するに止まり、願文の表現が具体的にどのような憶良によって取り入れられ、また、それらの作品が『萬葉集』においてどのような意義を持つかは関心外にあつたようである。

こうした事情を承けて、筆者は憶良の作品三点における敦煌願文の影響について、語句の出典から作品の意義について改めて考察を行い、憶良ひいては上代文学と願文の関連をめぐる研究を深めるための問題提起をしたいと思う。

二、「無題漢詩序」と「臨墳文」

願文は、佛前にて行われる祈祷文―「願文」「呪願文」「邑願文」「當家平安願文」のようなものだけではなく、「燃燈文」「臨墳文」「行城文」「布薩文」「印沙佛文」「追福文」「亡文」「驅儼文」等のような、目的に応じた題名も多々あるようである。この中の一種となる「臨墳文」は、本来死者を埋葬する際に読み上げられる願文であるが、興味深いことに、『萬葉集』巻五所収憶良の作となる「無題

漢詩序」とは多くの点で類似しているのである。以下、「無題漢詩序」の原文、「臨墳文」の例文、更に語句の出典の比較、という順で両者の関係について試論を行う。

(1) 原文

『萬葉集』巻五の冒頭に、妻大伴郎女を亡くした大伴旅人の「報凶問歌」に続き、山上憶良が献上した左記のような「無題漢詩序」が収められている。

無題漢詩序

蓋聞、四生起滅方夢皆空。三界漂流喻環不息。所以維摩大士在乎方丈、有懷染疾之患、釋迦能仁坐於雙林、無免泥洹之苦。故知、二聖至極不能拂力負之尋至、三千世界誰能逃黑闇之搜來。

二鼠競走而度目之鳥且飛、四蛇爭侵而過隙之駒夕走。嗟乎痛哉、紅顏共三從長逝、素質与四德永滅。何圖、偕老違於要期獨飛生於半路。蘭室屏風徒張、斷腸之哀弥痛。枕頭明鏡空懸、染筠之淚滄落。泉門一掩、無由再見、嗚呼哀哉。

愛河波浪已先滅、

苦海煩惱亦無結。

從來厭離此穢土、

本願託生彼淨刹。

(佐竹・木下・小島『萬葉集・本文篇』塙書房、二〇〇五年、一〇五頁。傍線は筆者による、以下同)

右の文について出典論の立場からその性格を論じた小島憲之氏は、『文選』巻五十九所収「頭陀寺碑文」(梁・王巾作)の序に見える「蓋聞」「能仁」「双樹」「大千」「三界」といった語がこの文と共有することを指摘しているが、一方、中西進氏は、一文の関連用語は、和漢の広範囲の文献に見られるところから、一つの出典に限定することは出来ないとする⁽⁵⁾。後に芳賀紀雄氏は文体の相違に注目しつつ、この文を誄や哀策の類と見ることに對して疑問を呈した上で、慣用的佛教語の多用する点を、死者のための設齋文・供養願文の類と結びつけ、この文は死者の供養・追善の機会に際して作られたものと推測し、一文を「設齋の願文の一変形」としている⁽⁶⁾。

芳賀氏は、こうした類の文章は正倉院に現存する聖武天皇宸翰の『雑集』(天平三年書写)に抄出された、唐越州の僧靈実の『鏡中积霊実集』にも見ることができると指摘し、これを受けて佐藤美知子氏はこの文を始めとする憶良の漢詩文との語彙について調査し、憶良が聖武に提供したものと仮説まで出している⁽⁷⁾。最終的にこの説は、一文を大宰帥大伴旅人の妻大伴郎女の死後、神龜五年(七二八)七月二十一日、百日の供養に際して献呈されたものと見る井村哲夫氏の考証によって支持され⁽⁸⁾、現在ほぼ定着しているのである。

しかし、『敦煌願文集』所収の「臨墳文」と比較してみると、右記「無題漢詩序」は、「臨墳文」とは文体から用語まで多くの類似が認められ、より密接な関連が考えられる。以下実例に即して比較してみよう。これから引用する原文は、黄徴・呉偉編校『敦煌願文集』に基づくが、引用文献の末尾に付す番号は、それぞれSⅡスタイン文書(Stein, Mark Aurel)とPⅡペリオ文書(Paul Pelliot)、北圖Ⅱ北京圖書館における当該文献の整理番号を指す。また、記号については『敦煌願文集』に従い、①脱字を補う場合は「」。②読み替え、仮借字、省文、異体字は()の中に示す。③錯字は()の中に示す。④残欠の場合は一字を□で示す。

(2) 「臨墳文」例

「臨墳文」は、「嘆墳文」とも称せられ、広く「亡文」―死者へ捧げる「願文」―の一種とも見られるが、主として死者の葬式に捧げられるものである。以下の例がその内容と様式を伝えている。

〈例1〉

是以受形三界、若電影之難留。人之百齡、以(似)隙光而非久。是知生死之道、熟(孰)能免之。縱使紅顏千載、終歸「□」上之塵。財積丘山、會化黃泉之土。是日、筑車颯颯、送玉質於荒郊。素盖翩翩、饒凶儀而亘道。至孝等對孤墳而覽躑、淚下教行。

扣棺槨以號咷、心推(摧)一寸。泉門永閉、再睹無期。地戶長
闕、更開何日。無以奉酬罔極、仗諸佛光之威光。孝等止哀停悲、
大衆為稱十念、

南無大慈大悲西方極樂世界阿彌陀仏三遍

南無大慈大悲西方極樂世界觀世音菩薩三遍

南無大慈大悲西方極樂世界大勢至菩薩三遍

南無大慈大悲地藏菩薩一遍

向來稱揚十念功德、滋益亡靈神生淨土、惟願花臺花蓋、空裏來
迎。寶座金床、承空接引。摩尼殿上、聽說苦、空。八解泥
(池)中、蕩除無名之垢。觀音、勢至、引到□方、弥勒尊前、
分明聽說。現存卷(眷)属、福樂百年。過往亡靈、神生淨土。
孝子等再拜奉辭、和南聖衆。

(廻向發願範本等)・嘆壙・S4174)

〈例2〉

蓋聞受形三界、若雷影而庭流。稟性閻浮、似電光之速轉。然則
寶山掩(奄)碎、玉樹俄摧。落桂質於長墳、埋花容於壙(曠)
野。臨植取別、哽噎斷腸。舍離恩慈、永作黃泉之客。啓音鳥之
兆(旒)、禮俗九原。崇白薦之焚(登)、嘶聲駟馬。魂驚素柳、
招泉路以飄飄。風起白雲、振松扇而蕭索。厥今請僧徒於郊外、
捨施利於笱前。懇志哀非、陳斯願者、奉為亡靈臨壙追福之嘉會

也。惟亡公乃志同崑玉、意並寒松。懷文抱擲地之才、韜武有猿
啼之略。將謂長延世上、永處人間。豈期天壽潛移、訃臨徵切。
遂所(使)威力解骨、被二鼠之侵年。毒火焚(焚)軀、為四蛇
[之]促命。俄辭自(白)日、將入玄泉(下殘)。

(亡文範本等)・臨壙・S5639)

〈例3〉

厥今所申意□(者)、奉為亡妻某七追念之加(嘉)會也。惟妻
乃彩輝桂壁、秀掩□蘭。四海之譽獨彰、千姿之禮早正。柔襟
[雪]影、婦礼播於六姻。淑質霜明、女範[弘]於九族。將謂
久居人代、偕老齊亡。何圖一已變傾、半身老苦。豈謂金俄
(娥)魂散、璧月光沈。霜(傷)□鏡於粧臺、貴(遺)鳳釵於綺
帳。魂歸冥路、恒母子之□之燈前、望還形而再感。但以情心
弥切、無路尋蹤。唯□□教之猷、福門控告。故於是日、以建齋
筵、邀屈聖凡、□竊開玉相、廣豎□(珍)綺。轉念焚香、且
采□崇善、並用莊嚴亡□妻神識、惟願弥(下殘缺)

(願文範本等)・亡妻文・S4992)

(3) 語句の出典

右記三例の「臨壙文」を一読するに、「蓋聞」「紅顏」「三界」「二
鼠」「四蛇」等、「無題漢詩序」に一致する用語が多く見られるが、

単なる偶然でないことが、そうした用語を含めた文章表現の比較を通して知られる。

(a) 釋迦能仁坐於雙林、無免泥洹之苦

「雙林」(沙羅樹の林)、「泥洹」(涅槃、Nirvana)はともによく見る佛教用語であるが、一文の表現、「泥洹の苦しびを免るること無し」は、前掲「臨墳文」及び他の願文に見える、

○是知生死之道、熟(孰)能免之。(例1)

○但以情(清)歲摧人、白駒過隙。未免三途之苦、常輝四瀑之流。(燃燈文)・P2854

に類似しており、次の(b)に挙げられる例文と併せて考えれば、憶良の表現に影響した可能性は否定し難い。

(b) 二鼠競走而度目之鳥且飛、四蛇争侵而過隙之駒夕走

右記の典故について、契沖『萬葉代匠記』(精撰本)が「寶頭盧突羅闍為優陀延王説法經」に見える寓話を引くが、類想句として、
宝亀十年(七七九)「大般若波羅蜜多經卷百七十六奥書」(『古経題跋随見録』)に見える、

豈是謂四蛇侵命、二鼠催年。報運既窮、奄然去世。

や、空海『遍照發揮性靈集』卷四にある、

四蛇、相鬪身府、両鼠、争伐命藤。

を出典と見る説もある。しかし、願文には、左記のように常套的な対句表現として数多く見られるのである。

○惟患者乃遂為寒暑注後(匡候)、摂養乖方。染流疾於五情、

抱煩疴於六府。力微動止、怯二鼠之侵騰(藤)。氣憊晨霄(宵)、
懼四蛇之毀愜(篋)。

(二月八日文等範文)・患文・S1441・P3825

○患者乃英靈俊傑、文武雙(全)……力微動止、怯二鼠之侵騰(藤)。氣憊(輟)晨霄(宵)、懼四蛇之毀愜(篋)。

(俗丈夫患文)・S5561

○是以兩鼠催年、恒思嚙葛。四蛇捉(促)命、本目難留。

(亡文等句段集抄)・願上人・P2313

○夫四山逼命、千古未免其禍。二鼠催年、百代同迫其福。

(亡文等句段集抄)・願上人・P2313

○然今施主知四蛇而同篋、悟三界之無常。造二鼠之侵騰、識六

塵之非救(久) (佛文・P2341)

○蓋聞無餘涅槃、金棺永寂。有為生死、火宅恒然。但世界無常、

曆(歷)二時如(運轉)。光陰遷易、馳四想(相)以奔流。

(臨壇文)・S6417)

○蓋聞無餘涅槃、金棺永寂。有為生死、火宅恒然。但世界無常、

光陰千遍(變)。故有二儀運轉、四相奔流、明闇交遷、晨昏遞

謝。 (臨壇文)・P234)

○無餘涅槃、金棺永謝。有為生死、火宅恒然。但世界無常、曆

(歷)二時而運轉。光陰遷亦(易)、除四相以奔流。

(臨壇文)・北圖・7133)

更に、「四蛇争侵而過隙之駒夕走」についても、願文にある、

○人之百齡、以(似)隙光而非久。(例1)

○但以情(清)歲摧人、白駒過隙。(燃燈文)・P2854)

との表現にも通じている。従って、一文の出典を考える際、右記「臨壇文」を中心とする願文の表現を優先すべきではないか。

(c) 何圖偕老違於要期、獨飛生於半路

『代匠記』は「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔」(漢書・李陵與蘇武

詩)及び「棲々失群鳥、日暮猶獨飛」(陶淵明「飲酒」)を示している。また、芳賀紀雄氏は、似た表現として、『遍照發揮性靈集』巻七に見る空海作の願文、達嘸文の例、

○誰圖降年不遠、片鳧忽飛。(前清・丹州「為亡妻達嘸」)

○豈圖、生離哭千里、偕老喪一期。

(大夫笠左衛佐「為亡室造大日槓像願文」)

を指摘しているが、願文には、前引の例を含めて次の一連の表現が注目される。

○奉為亡妻某七追念之加(嘉)會也。……將謂久居人代、偕老

齊亡。何圖一已變傾、半身老苦。(例3)

○本冀外光台粗(祖?筆者注)、内益家風。將素首以同歡、去泉

臺而共住。何期雙鸞一翥、雨(兩)劍單沈。齊眉之礼奚申、跪

膝之儀孰要。(亡文範本等)・亡夫・S5639)

○庭前悄悄、望圓月以增悲。帳「中」寥寥、對孤燈而更切。闌

念以孤鸞獨處、林(臨)鏡而增悲。別鶴分飛、睹琴聲而氣盡。

(願文等範本)・夫亡・S2832)

○嗟一鳳之長辭、痛雙鸞之失侶。(願文範本)・天王・P2044)

○何奈鴛衾半卷、鳳枕孤遺。(亡文範本等)・夫人・S5639)

とある表現が見られ、「偕老」のみならず、意味の方からして、「獨飛生於半路」に対して「半身老苦」「雙鸞一翫」「孤鸞獨處」「別鶴分飛」等がいずれも突然飛び立つ鳥をもって死者を喩えながら、取り残された者の孤独を言うものであり、互いに深く関わる表現と見られよう。

(d) 泉門一掩、無由再見

これについても、諸説があり、とりわけ墓誌類に集中する次の一連の表現を検出した上でその関連と見る説が有力である。

○雖非舞鶴、即掩泉門。 (『瘦子山集』卷十五)

○泉門一閉、白日淪光。

(北魏「元仙墓誌」「漢魏南北朝墓誌集釈」図版34)

○泉門既掩、宝鏡自塵。

(北魏「王夫人寧陵公主墓誌」同右図版190)

○泉門鎮掩、誰迎夢齡。

(隋「張業暨妻路氏墓誌」同右図版462・2)

○泉門一閉、去矣攸攸。

(北魏「蘇屯墓誌」同右図版238)

○泉門一閉、陵谷代遷。

(北魏「渤海大守王偃墓誌」「八瓊室金石補正」卷十八)

一方、芳賀氏は墓誌の他に、唐・駱賓王「傷祝阿王明府」の詩、

煙晦泉門閉、日尽夜台空。

(『駱臨海集』卷二)

にも関連を求めている。しかし、諸例は「泉門」こそ一致するものの、その次の句は殆ど「これをもって時間が永遠に停止する」意となっており、「無由再見―もう永遠に会えない」とは異なる表現である。これに対して、晋・潘岳「悼亡詩三首」には、

之子歸窮泉、重壤永幽隔。

とある句がまだしも近い例に見えるが、色々ある中で、やはり前引例1の、

泉門永閉、再睹無期。

は、「泉門一掩、無由再見」の意味と一致しているので、両者はより近い関係にあることが認められよう。更にもう一例も参考されよう。

慈顔一去、再睹無期。
(願文範本等・脱服文・P2237)

(e) 愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無結。從來厭離此穢土、本願託生彼淨刹

従来の研究では、この漢詩を漢文から独立したものと見る傾向がある。中では井村哲夫氏が「憶良はこの作文に七言の詩を添えたが、その詩の趣旨は、亡き人共々後生を淨刹によせようというもので、願文の結びに相当する内容の詩である」という見解を示し、更にその意義について次のように語る。

萬葉集の中で、極楽は見つけ難いのだが、山上憶良の漢詩、愛河波浪已先滅、苦海煩惱亦無結。從來厭離此穢土、本願託生彼淨刹。この結句の「淨刹」は、本願託生の願いを述べるものであるから、とりたてては例の阿弥陀の第十八願(念仏往生願)を想起し易いのであり、あるいはこれは西方極楽淨土を觀想しているものかもしれない。写経願文の一例を参考しておく。おのおのも本願のまにま、上天に往生して弥陀を頂礼し、淨域に遊戯して弥陀に面え奉り……

(長屋王發願大般若波羅蜜多經輿跋願文)
ちなみに、この漢詩は大伴旅人が妻大伴郎女を喪った不幸に際し、その百日供養の折に供養願文の意味をこめて作詩し、旅人

に献呈したものと考えられる作品である。厭離穢土・本願託生の語句は供養願文におさまりの成句とは言え、憶良が当時としてはかなり先鋭的だったと思われる淨土教の思想に触れていたらしいということが知られる。そのことが憶良の思想や作品形成に関わっているところもあるいは小さくないように思われる。

これについては、〈例1〉に見える「孝等止哀停悲、大衆為稱十念」とある部分に注目したい。その目的は、「十念功德」を称揚することによって、「過往」靈、神生淨土——亡靈が淨土に再生されることを祈るものであるが、そもそも一文の最後に位置付けられるこの漢詩も、内容からして同様の機能を發揮しているのではないか。つまり、この漢詩は、本来「十念功德」の代わりに作られたものであろう。ちなみに、願文類において、文末を飾る表現として、左記のように、

○惟願出沈淪之苦海、乘解脱之舟船。離穢濁之閻浮、生極樂之國土。
(發願文範本・北圖8672)

○其僧徒「以」濟濟、樂法侶以誦誦。棄煩惱之愛河、登涅槃之彼岸。
(發願文範本・北圖8672)

○唯願神生淨土、識坐蓮台。常辭五濁之中、永出六天之外。
(二月八日文等範本・亡父母文・甲卷51441・乙卷123825)

○唯願識託西方、魂遊淨國。 (亡)男文(・P2341)

○唯願遨遊淨土、身業於七池。消散蓮臺、戲心花於八水。

(廻向發願等範本(・亡・S4081))

○承七花之淨國、遊八解之天宮。向十地之无窮、登一生之補處。

(廻向發願等範本(・亡・S4081))

というものが多数見られる。とりわけ右記「發願文範本」の文章は、全文の趣旨のみならず、「無題漢詩序」とは用語の一致も見られ、他の例と合わせていずれも駢儷文または韻文の形式を用いて死者の亡霊の浄土往生を祈念するものである。憶良が先鋭的だった浄土教の思想を一文に反映させたという見方も出来るが、右記のことは、一文の後に続く漢詩の意味、機能について再考する必要性を示唆しており、今後更に追求されるべき問題であろう。

(4) 『萬葉集』における一文の意義

以上、「無題漢詩序」と敦煌願文―「臨墳文」の類似点について指摘した。ここで考えたいのは、『萬葉集』における一文の意義である。従来の研究では、日本における願文の発生は奈良朝に遡るとされているが、本格的な作成は空海に始まるとの認識が一般的である。例えば、芳賀紀雄「憶良の挽歌詩」も、

願文は、奈良朝においては写経の跋語として添えられたもの程度しか残らないが、空海によって基盤が敷かれ、爾後盛行を見るに到ったことは周知である。先蹤となるべき中国の例に關していえば、唐代では、すでに四十九日までの供養はもとより、卒哭・小祥・大祥が佛事と結びついていただけに、願文のたぐいも頻繁に行われたと想像されるものの、ほとんどが散逸したようである。これがたんなる憶測でないことは、天平三(七三一)年聖武天皇の書写になる「聖武天皇宸翰雜集」(正倉院藏)のなかに、霊実の作例が伝えられる事実によって明瞭であろう。すなわち『鏡中积霊実集』所収の「為人父忌設齋文」「為人母祥文」「為人妻祥設齋文」等がそれである。『日本国見在書目錄』(別集家)には『积霊実集十卷』と録し、佚書とはなっていないが、当時かかる文章が舶載されて憶良の周囲には存しており、また空海の願文の淵源となったことだけは、確信しうらと思う。

とされている。芳賀氏は憶良周辺に舶載願文が存していたことを推測しているが、『积霊実集十卷』を見る術もない今では、両者の關係を確認することは難しい。しかし、語句の出典を通じて見たように、「無題漢詩序」における憶良の表現は、願文の手引きと見られる「範本」を始め、多様な願文を踏まえて述作しているのみならず、

「臨墳文」の体裁を取ろうとする傾向さえ認められるのである。このような事情から、この「無題漢詩序」と名づけられる文章について、名称から内容に至るまで、今一度検討されねばならないと思う。筆者としては、芳賀氏が取る「設斎の願文の一変形」説よりも一歩進んで、一文を上代日本における願文作成の先蹤と見て差し支えないと考えている。

三、「沈痾自哀文」と「患文」

憶良の述作と願文の関係は、前項に取り上げた例に止まらない。例の「沈痾自哀文」にも、願文の一種である「患文」の影響が色濃く認められる。『敦煌願文集』に拠れば、

「患」は即ち病気を患うの義で、「患文」は肉親が病気に罹った時、その親類が寺院に財物を寄付し、神靈の救助や加護を祈る時に誦読する文章である。よく見られる「亡文」、「患難月文」、「臨墳文」等の文章とは大同小異で、敦煌地区で広く流行していた願文の一種である。

と定義付けられている。『敦煌願文集』には、合計二十二篇の「患文」と題する願文が収録されている。そして、個々の内容について読むと、「沈痾自哀文」とは、文体、語句、構造において多くの類

似点を認めることが出来る。以下、両者を比較するために、まず「沈痾自哀文」の原文を掲げる。

(一) 原文

沈痾自哀文

竊以、朝夕佃食山野者、猶無灾害而得度世、謂常執弓箭不避六齋所值禽獸不論大小孕及不孕、並皆熟食、以此爲業者也。晝夜釣漁河海者、尚有慶福而全經俗。謂、漁夫潛女各有所勤、男者手把竹竿能釣波浪之上、女者腰帶鑿籠潛探深潭之底者也。況乎我從胎生迄于今日、自有修善之志、曾無作惡之心。謂聞諸惡莫作、諸善奉行之教也。所以禮拜三寶、無日不勤、每日誦經發露懺悔也。敬重百神、鮮夜有闕。謂、敬拜天地諸神等也。嗟乎媿哉、我犯何罪、遭此重疾。謂、未知過去所造之罪若是現前所犯之過。無犯罪過何獲此病乎。初沈痾已來、年月稍多。謂、經十餘年也。是時年七十有四、鬢髮斑白、筋力羸羸。不但年老復加斯病。諺曰、痛瘡灌塩、短材截端、此之謂也。四支不動、百節皆疼、身體太重、猶負鈞石。廿四銖爲一兩、十六兩爲一斤、卅斤爲一鈞、四鈞爲一石、合一百廿斤也。懸布欲立、如折翼之鳥、倚杖且步、比跛足之驢。吾以身已穿俗、心亦累塵。欲知禍之所伏、崇之所隱、龜卜之門、巫祝之室、無不往問。若實若妄、隨其所教、奉幣帛、無不祈禱。然而弥有增苦、曾無減差。吾聞、前代多有

良醫、救療蒼生病患。至若榆柎扁鵲華佗秦和緩葛稚川陶隱居張仲景等、皆是在世良醫、無不除愈也。扁鵲姓秦、字越人、勃海郡人也。割胸採心易而置之、投以神藥、即瘡如平也。華佗字元化、沛國譙人也。

若有病結積沈重在內者、剝腸取病、縫復摩膏、四五日差定。追望件醫、非敢所及。若逢聖醫神藥者、仰願、割剝五藏、抄探百病、尋達膏盲之隙處、盲鼻也、心下爲膏。攻之不可、達之不及、藥不至焉。欲顯二豎之逃匿。謂、晉景公疾、秦醫緩視而還者、可謂爲鬼所熬也。命根既盡、終其天年、尚爲哀。聖人賢者一切含靈、誰免此道乎。何況、生錄未半、爲鬼枉致、顏色壯年、爲病橫困者乎。在世大患、孰甚于此。志惟記云、廣平前大守北海徐玄方之女、年十八歲而死。其靈謂馮馬子曰、案我生錄、當壽八十餘歲。今爲妖鬼所枉致、已經四年。此遇馮馬子、乃得更活是也。內教云、瞻浮州人壽百二十歲。謹案、此數非必不得過此、故、壽延經云、有比丘、名曰難達。臨命終時、詣佛請壽、則延十八年。但善爲者天地相畢。其壽夭者業報所招、隨其脩短而爲半也。未盈斯半而遭死去。故曰未半也。任徵君曰、病從口入。故君子節其飲食。由斯言之、人遇疾病不必妖鬼。夫醫方諸家之廣說、飲食禁忌之厚訓、知易行難之鈍情、三者盈目滿耳、由來久矣。抱朴子曰、人但不知其當死之日、故不憂耳。若誠知羽翮可得延期者。必將爲之。以此而觀、乃知、我病蓋斯飲食所招而、不能自治者乎。帛公略說曰、伏思自勵以斯長生。生可貪也、死可畏也。天地之大德曰生。故死人不及生鼠。雖爲王侯一日絕氣、積金如山、誰爲富哉。威勢如海、誰爲貴哉。遊仙窟曰、九泉下人、一錢不直。孔子曰、受

之於天、不可變易者形也。受之於命、不可請益者壽也。見鬼谷先生相人書。故知生之極貴、命之至重。欲言言窮。何以言之。欲慮慮絕。何由慮之。惟以人無賢愚、世無古今、咸悉嗟歎。歲月競流、晝夜不息。曾子曰、往而不反者年也。宣尼臨川之歎是矣也。老疾相催、朝夕侵動。一代權樂未盡席前、魏文惜時賢詩曰、未盡西苑夜、劇作北邙塵也。千年愁苦更繼坐後。古詩云、人生不滿百、何懷千年憂。若夫群生品類、莫不皆有盡之身並求無窮之命。所以道人方士、自負丹經入於名山而合藥者、養性怡神以求長生。抱朴子曰、神農云、百病不愈、安得長生。帛公又曰、生好物也、死惡物也。若不幸而不得長生者、猶以生涯無病患者爲福大哉。今吾爲病見惱、不得臥坐。向東向西莫知所爲。無福至甚惣集于我。人願天從。如有實者、仰願、頓除此病、賴得如平。以鼠爲喻、豈不愧乎。已見上也。

〔前掲『萬葉集・本文篇』一一一—一二三頁〕

右の「沈痾自哀文」は、自注の部分を除いても一千字余りとなり、『萬葉集』随一の長篇である。その成立の背景について様々な憶測があるが、一般的には重病に臥した憶良が自身の上を嘆くものと見なされている。しかし、『敦煌願文集』所収「患文」の類と比較してみれば、「沈痾自哀文」をめぐるこうした通説にも、新たな疑問が生じてくるのである。

(2) 「患文」例

以下、『敦煌願文集』の中から「患文」例を三つ選び、「沈痾自哀文」との対比を行ってみる。

〈例1〉

夫佛為醫王、有疾咸救。法為良藥、無苦不治。是以應念消矢(矢)、所求必遂者、則我佛、法之用也。然今即有坐前施主跪爐捨施所申意者、奉為某公染患經今數旬、藥餌果(累)醫、不蒙抽減。謹將微斯(渺)、投杖三尊。伏乞慈悲、希垂憐念諸家(之嘉)會也。惟患者乃四大假合、□(疾)瘴纏身。百節酸疼、六情恍惚。須(雖)服人間藥餌、奇聖神方。種種療治、不蒙痊愈。伏聞三寶、是出世醫王。諸佛如來、為四生福田之慈父。所以危中告佛、厄乃求僧。仰拓(託)三尊、乞祈加護。以斯捨施念誦功德、廻向福因、先用莊嚴患者即體、惟願四百四病、藉此雲消。五蓋十纏、因慈(茲)斷滅。藥王、藥上、受(授)与神方。觀音、妙音、施其妙藥。醍醐灌頂、得受不死之方、賢聖證知、垂惠長生之味。又持勝福、次用莊嚴施主及內外親姻等、惟願身如藥樹、万病不侵。體如金剛、常堅常固。今世後世、莫絕善緣。此劫來生、道芽轉盛。然後先亡遠代、承念誦往生西方。見在宗枝、保禎祥而延年益受(壽)。摩訶般若、利業無邊。大

衆虔誠、一切普誦。

〔患文〕・甲卷・P2058、乙卷P3566)

〈例2〉

夫慈悲普化、遍滿閻浮。大覺雄威、度群迷於六趣。故使維摩現疾、應品類之根機。馬麦金鏹(鎗)、表衆生之本業。然今施主某公祈妙福、捨所珍意者、為病患之所建也。公乃四大假合、痛惱纏身。百節酸疼、六情恍惚。雖服人間藥餌、世上醫王、種種療治、未蒙痊損。復聞三寶、是出世間之法王。諸佛如來、為四生之慈父。恒用伽陀之妙藥、濟六道之沉痾。以自在之神通、拔人、天之重病。所以危中告佛、厄裏求僧。仰托三尊、乞祈加護。惟願以慈(茲)捨施功德、念誦勝因、先用莊嚴患者即體、惟願神湯灌口、痛惱雲除。妙藥茲(茲)身、災殃霧卷。飲雪山之甘露、惠(慧)命遐長。餌功德之香餐、色身堅固。又持是福、次用莊嚴施主合門居眷、內外親姻等、惟願諸佛備體、龍天護持。灾障不侵、功德圓滿。然後散霑法界、普及有情。賴此勝因、咸登樂果。摩訶般若、利業无邊。大衆虔誠、一切普誦。

〔患文〕・P2854)

〈例3〉

夫慈悲普化、遍滿閻〔於〕浮。大覺雄威、度群生於六道。故所

(使) 維摩現疾、托在毘耶。諸賢問疾之徒、往於方丈之室。菩薩現病、應品類之根機。馬麦金鏹(鎗)、表衆生之本業。然今意者、病患之也。惟公乃四大假合、椎疾纏身。百節酸疼、六情恍惚。雖復(服)人間藥餌、世上醫王、諸佛如來為種種療治、未蒙詮損。復問(聞)三保(寶)之力、是出世法王。諸佛如來、為死(四)生之慈父。所以危中告佛、厄乃求僧。仰托三尊、請求蒙護。惟願恒用加他之妙藥、濟六道之沉痾。自在神通、拔天人之重病。故知請(諸)佛聖力、不可思議(議)、所有投成(誠)、皆蒙利益。以此功德、先用莊嚴患者即體、惟願觀音放月灑芳、亦以濟足大聖垂花、扇香風而湯(蕩)慮。然則六塵八苦、延惠(慧)命於(下)殘。(《患文》・北圖C854)

(3) 語句の出典

(a) 沈痾

小島憲之は、『文館詞林』に見える「沈此旧痾、不敢屢辞」(卷一五二、西晋潘岳、「贈王冑」を発見し、その出典と見る。但し、「沈此旧痾」の「沈」は、四言の親属贈答詩に見え、「むしろ俗語的といえるかもしれない。用例があまり多く見付からないのは、そこに原因がある」と指摘している。¹⁰⁾これに対して井村哲夫氏は、『晋書・楽廣傳』に見える「客豁然意解、沈痾頓癒。」を挙げている。いずれにも従いたいだが、「沈痾」は『藝文類聚』〈疾〉項にも、

沈痾類弩影、積弊似河魚。

(梁・簡文帝「臥疾詩」)

や、「歳晚沈痾詩」(梁・朱超道)との題にも見えるように、広く使われていた用語であり、出典を特定することは容易ではない。しかし、右記「患文」に見える「恒用加他之妙藥、濟六道之沉痾」二例は、熟語としての「沉痾」を使用している。更に、「亡文等句段抄」には、

沈頓之痾、彈指之間霧歇。

(《亡文等句段抄》・P2313)

とある例から、小島が指摘する「沈此旧痾」と並んで、「沈痾」に基づいた表現である可能性が考えられる。もう一例、次のような例もある。

慈雲布而熱惱清涼、惠(慧)影臨而沈痾頓息。

(《亡文範本等》・疾癒意・S5639 S5640)

このように、「患文」における「沈痾」の用例と併せて見るに、憶良における用法は、他の漢籍よりも近い距離にあることが推測されよう。

(b) 況乎我從胎生迄于今日、自有修善之志、曾無作惡之心。所以

禮拜三寶、無日不勤、……敬重百神、鮮夜有闕。……嗟乎媿哉、

我犯何罪、遭此重疾

この一節は、「私は生まれつきの信心者なのに、この重病はいったいどんな罪過を犯したせいか」という自問がポイントであるが、注目すべきは、その具体的表現の願文との類似である。〈願文範文等〉なる条には、「患文」を作成するにあたり、発願者の身分によって異なる表現を用いよ、との模範文が示されているのである。それには、僧侶が発願する場合には「僧云」、尼が発願する場合には「尼女云」との指示及び模範文が明示されているが、所謂「俗人」——一般人が発願する時、次のような模範文が示されている。

俗人云、乃深信因果、非乃今生。慕道情殷、誠惟曩劫。

〈願文範文等〉・S343 P2255)

大意は、「一般人なら次のように言おう、深い信心の因果は今生だけではない。じつに何劫も前の昔から〔曩劫〕昔の劫—何劫も前から〕、仏道を慕う気持ちは、ひたすらだったのだ、と」。ちなみに殷と誠とともに信心深い意。「曩劫」の例は、外にも例えば梁の武帝蕭衍が、皇后の郭氏が往生できるように、誌公禪師等の高僧に

頼んで作成したかの名高い『慈悲道場懺法』（別名『梁皇寶懺』）に、

珍奇妙供、普奉諸佛聖賢、稱禮洪名寶號。稽顙皈依、發露投誠。

切念求懺某等、遠從曩劫、直至今生。迷五蘊之去來、隨五濁之

流轉。

というように用いられている。「我從胎生迄于今日」の一文を右記文中の「遠從曩劫、直至今生」と比較してみれば、文意はほぼ同じである。「胎生」は、「曩劫」の類義語として、いずれも「遠い昔から」の意であり、もって信心の深さを表している。ここに推測できるのは、同じく「俗人」としての憶良がこの一文を草するにあたり、自身の状況もさることながら、願文の模範文を念頭に浮かべていたこともあり得たのであろう。

(c) 初沈痾已來、年月稍多……四支不動、百節皆疼……若逢聖醫
神藥者云々

「初沈痾已來」より始まり、病気の完治を祈る「欲顯二豎之逃匿」に至るまでの合計三百五十字に近い文章は、前引三例の「患文」の次の表現に通じるものである。

○百節酸疼、六情恍惚。(例1、2、3)

○惟願……薬王、薬上、受（授）与神方。観音、妙音、施其妙薬。（例1）

○復聞三寶、是出世間之法王。諸佛如来、為四生之慈父。恒用伽陀之妙薬、濟六道之沉痾。以自在之神通、拔人、天之重病。

（例2、3）

更に、願文には、

○不逢編（扁）鵠、寄託金人。願得痊和、清齋是賽。

（願文等範本・S2832）

とある内容も注目される。「扁鵠に巡り合えなかつたら、金人（佛像）の方に願いを寄せよう」との意であるが、「沈痾自哀文」の「至若楡柎扁鵠華他秦和緩葛稚川陶隱居張仲景等、皆是在世良醫」なる一文の内容に通ずる。このあたりの文章は、願文の簡潔さに比べて、「四支不動、百節皆疼」の外、「鬢髮斑白、筋力尫羸」「痛瘡灌塩、短材截端」「鈞石」「折翼之鳥」「跛足之驢」等、躍動感のあるタツチで病苦や老体を生き生きと描いているところが特徴である。これは、願文の体裁を熟知する憶良が、模範文のいくらか形式ばった文章を嫌って、あえて自らの感情を盛り込んだ結果なのか、それとも単なる筆先の彩を弄したのか、どちらとも判断されようが、

一節を通して願文との深い関わりが窺えれば足る。

(d) 以此而觀、乃知、我病蓋斯飲食所招而、不能自治者乎

井村氏は、一文を評して、

憶良はここで、死ぬ時期を知らされない限り、自分ではコントロールできないものとして口腹の欲、飲食について語っている。また、飲食の節制の困難を刑罰の刑にも比して語る。この述懐の口吻からすると、憶良はかなり飲食に淫していた者であるらしい。

という。憶良が果たして「飲食に淫していた」かどうかは定かでないが、「飲食の節制の困難」という解釈は、紙背に徹した読みである。一文は、「我犯何罪、遭此重疾」の問いに呼応して、あれこれと病因を模索し、とうとう「我病蓋斯飲食所招而」という回答に辿りついたものと見られる。それは左記のような願文一般に見られる飲食節制に失敗し、病を得るに至る表現に通じる。

○攝養乖方。

（二月八日文等範本・患文◇・甲卷S141 乙卷S548）

○為（唯）患者乃攝養乖違、如（而）「嬰」沈疾。

〔患文〕・P2058)

○捨施意者、頃自攝卷〔養〕乖方、忽瘦〔嬰〕稜疾。屢投菓石、未鈎〔沐〕瘳除。所恐露命難留、風燈易滅。

〔願文範文等〕・願文・S343 P2255)

○攝養乖方。〔俗丈夫患文〕・S5561)

○攝養乖方。〔患文〕・甲卷S1441、乙卷S5548)

○攝養乖方。〔丈夫患文〕・S5561)

「攝養乖方」とは、他ならぬ「飲食生活の不養生、不摂生」の意である。憶良はここに道教文献『帛公略説』まで引き出してあらゆる長生術にふれて養生の重要性を説くが、「我病蓋斯飲食所招而」の一文は、むしろ佛教的観想に触発された、悔恨・懺悔の気持を表す発言と見なされよう。逆説的な証拠として、神佛に誓い、口腹の欲を抑えるという願文が左記のように求められる。

又願從今以去、至乎道場、生生世世、不復噉食衆生、乃至夢中不飲乳蜜、無論現前。……又願在在生處、若未有識知、未得本心、或以乳、或以蜜、或以魚、或以肉、凡諸生類以相逼飲者、願使弟子蕭衍口即噤即閉。若苦相逼強、舌卷入喉、終不可開。令彼慙愧、起慈悲心。噉食生類、畢竟永逝。若有人云「以水飲、以果來」、心生歡喜、口即開受、皆成甘露、微妙上藥。人甘口

涼、身心慧淨、氣力充溢、慈心普遍。一切四生、受无畏施、俱得飽〔飽〕滿無渴想、水陸空行一切四生不相噉食、皆以慈心相向。〔梁・蕭衍〕〔東都發願文〕・P2189)

身体安穩及び来世平安のために、これから素食以外、生き物等は一切口にしないとの内容である。このように見ると、一文における憶良の思想は、単なる道教的摂生、養生の立場からの発言ではなく、根底には佛教の因果応報説も潜んでいるのではないか。

(e) 咸悉嗟歎。歲月競流、晝夜不息

自注では、一句に対して「宣尼臨川之歎亦是矣也」とあるように、もとより出典を『論語』子罕第九にある、

子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

とすべきであるが、これもやはり願文の常套句として左記のように数多く求められる。

○是以元興大患之嗟、仲尼有逝川之嘆。

〔願文等範本〕・因産上事・S2832)

○悲風樹之易慟〔動〕、追誓〔逝〕水之難留。

〈願文範本等〉・「僧号」・S343¹・P2915)

○怨逝水之東浪(流)。

〈二月八日文等範本〉・「文」・S1441¹・P3825)

○莊舟(周)起嘆於西池、魯火(父)軫思於東水。

〈「文」範本等〉・S5639)

○何圖業運已逼、東波之浪難廻。

〈「考妣文範本等」・S5637)

○蓋聞泡幻不停、闕孔川而莫駐。刹那相謝、歷莊閨而何道。

〈「先聖皇帝遠忌文」・P2854)

○恍惚幽夜泉扃、空望「於」逝川。哽咽靈儀闕戸、徒追於落日。

〈「為「兄太保追福文」」・P1104)

このように見てくると、「沈痾自哀文」における一文の由来を考える場合、憶良には、知識として『論語』の内容があったとしても、これを草するにあたり、願文の体裁が先ずその脳裏を去来していたと思われる。

(f) 聖人賢者一切含靈、誰免此道乎……老疾相催、朝夕侵動

右記「二文は、「患文」例にはないが、前引〈臨壙文〉にある、

○是知生死之道、熟(孰)能免之。 (臨壙文)例1)

○二鼠之侵年。 (臨壙文)例2)

○但以情(清)歲摧人、白駒過隙。未免三途之苦、常輝四瀑之流。 (燃燈文)・P2854)

に類した表現であり、同じ憶良の文章として、願文との関係において、その成立を考えたい。

(4)「自哀文」の作成意図

土屋文明『萬葉集私注』は、「哀は哀悼文の一体で、……生前ながら、久しい病気がいえないので、自分の哀悼文を作つて置くといふ程の心持である」と見る。一方、村山出氏は、陶淵明の「自祭文」を一文の先例とする⁽¹¹⁾。また中西進氏は、盧照鄰「積疾文」との関連を指摘した上で、「ひよつとすると、先蹤とするものは積疾文であり、記し終った絶望の中で、自虐的に『自哀文』という題をつけたものではなかったか。ただしその内容は「生を願う文」というべきものであって、『哀文』の類とはほど遠いものである」として⁽¹²⁾いる。井村氏は、「自ら哀しぶる文」と理解したい。その内容は、生命の貴重を論じ、息災長生を求める群生品類の道理を説き、わが病を天に向かつて告発するもので、その「自哀」文とはやがて『自愛』の文であり、論であり、説である」との見解を主張している⁽¹³⁾。

小学館の日本古典文学全集『萬葉集』は、一文の意味を「死を予見

した自悼文」としている¹⁴⁾。

諸説どれも一理あるが、考察してきたように、一文の構成と用語の患文との類似から、その意味及び作成意図について改めて考える必要があるだろう。

具体的には、例えば、従来の解釈では、「自哀」は「自ら哀しぶる文」としている。しかし、漢語としての「哀」には「カナシブ」の意は無く、馬叙倫『説文解字六書疏證』卷三に、「哀訓唁也、哭泣之事。但嗟歎以言、故謂之唁。今所謂表同情也」とのように、本来言語を伴った、「同情」を表す行為でもあった。そして、「哀」の熟語としての「哀願」は、「悲願」「歎願」「呪願」「哭願」とともに、佛教説話によく見られ、いずれも言語を伴った祈祷行為を指す¹⁵⁾。『日本書紀』卷下にある次のような説話がある。

其柴枝皮上、忽然化生彌勒菩薩像。時彼行者、見之仰瞻、巡柴哀願。諸人傳聞、來見彼像。或獻俵稻、或獻錢衣。及以供上一切財物、奉繕寫瑜伽論百卷、因設齋會、既而其像奄然不現、誠知、彌勒之高有兜率天上、應願所示。願主下在苦縛凡地、深信招祐、何更疑之也。

〔彌勒菩薩応於所願示奇形縁第八〕

文中の「哀願」は、言うまでもなくそうした言語を伴った祈祷行

為であるが、「見之仰瞻、巡柴哀願」の「仰瞻―哀願」は、「佛像を仰ぎて見、言葉をもつて願う」の意であり、願文に類出する熟語「仰願」に基づく原表現である。『敦煌願文集』に複数見られる「歎願文」「呪願文」と題する願文も、「哀願」とともに、佛教のコンテキストに成り立つ表現と見られる。

こうしたことから、「自哀文」は、憶良が従来ある「自悼文」「自祭文」の表現に倣いつつも、その意味は「自悼」「自祭」が表そうとする、古代中国の士人たちが自らの不遇、人生の無常を悲嘆する消極的なものではなく、「歎願文」「呪願文」に類した、生への積極的な希求から、重病に伏した自分のために書いた、文字通り「生を願う」患文と推測されよう。

また、先述のように、一般に願文の作成目的は、主催者（發願者・施主）自身の願意を神佛の前に読み上げるところにあるが、願文の中でも、しばしばこれに言及するのである。

- 然今即有坐前施主跪爐捨施所申意者。(例1)
- 然今施主某公祈妙福、捨所珍意者、為病患之所建也。(例2)
- 唯願發神足、運悲心、降臨道場……。(〈丈夫患文〉・SS561)
- 伏願去定花臺、降斯法會。(〈僧患文〉・SS561)
- 唯願發神足、運悲心、降臨道場……。(〈俗丈夫患文〉・SS561)
- 今投道場、虛(希)求濟拔諸(之)所見(建)也。……願今

日今時、頼此道場、證明功德、即日轉生。

〈丈夫患文〉・S5561)

古代中国敦煌地方における願文の用途をめぐって、中国人研究者の余欣氏が、それぞれ「道場施捨」「設齋啓願」「燃燈供養」という三つの場合があったことを究明し、願文は、主としてそうした場所において唱読されるもの¹⁶⁾ということを指摘している。上代日本におけるかかる祈禱活動がいかなる形式で行われていたかは判らないが、「沈痾自哀文」の作成も、法会、道場との関連において今後考察する必要がある。

そして、以上二つに加えて、「沈痾自哀文」を結ぶにあたり用いられた表現、

○仰願、頓除此病、頼得如平。

は、他の願文に見える常套的表現、

○惟願千殃頓絶、萬福来臻。 (二月八日文等範本)・P3825)

○伏願……身病心病、即日(日)消除。臥安覺安、起居輕利。

〈患文〉・S4537)

○願……於(放)捨患如(見)、還復而(如)故。

〈丈夫患文〉・S5561)

と相似していることから、一文が患文として作成された可能性を示唆している。

ともかく、「自哀文」の成立をめぐる諸説林立の現状は、この長文の性質の複雑さを物語っており、右記の推論を、さしずめ一つの新しい仮説として提示しておきたい。

四、「恋男子名古日歌」と「亡文」

願文の影響は、憶良の漢文述作のみに限られていないようである。「憶良の操」―その作らしい巻五の最後を飾る「男子、名古日を恋ひし歌三首」と題する長歌も、願文の一種である「亡文」―逝去した者を追善、追悼する―文を踏まえた可能性が高い。まず原文を掲げよう。

(1) 原文

男子、名古日を恋ひし歌三首

世の人の貴び願ふ七種の宝も我は何せむに我が中の生まれ出でたる白玉の我が子古日は明星の明くる朝はしきたへの床の辺去らず立てれども居れどもともに戯れ夕星の夕にな

ればいざ寝よと手を携はり父母もうへはなさがりさきくさ
の中にを寝むと愛しくしが語らへばいつしかも人となり出
でて悪しけくも善けくも見むと大船の思ひ頼むに思はぬに
横しま風の尔布敷可尔覆ひ来ぬればせむすべのたどぎを知
らに白たへのたすきを掛けませ鏡手に取り持ちて天つ神仰
ぎ祈ひ禱み国つ神伏してぬかつきかからずもかかりも神の
まにまにと立ちあざり我乞ひ禱めどしましくも良けくはな
しにやくやくにかたちつくほり朝な朝な言ふこと止みたま
きはる命絶えぬれ立ち踊り足すり叫び伏し仰ぎ胸うち嘆き
手に持てる我が子飛ばしつ世の中の道

〈反歌〉

若ければ道行き知らじ路はせむ下への使負ひて通らせ
布施置きて吾は乞ひ禱むあざむかず直に率行きて天路知らしめ
(佐竹昭広他『萬葉集』(新日本古典文学大系)岩波書店、一九九
九年、五二五―五二七頁)

右の長歌はこれまで挽歌と見なされ、契沖、中西進氏等による代
作説、それに反対する説等、相拮抗しつつ今日に至る¹⁷⁾。芳賀紀雄氏
が一首の表現について、「亡児哀傷」という、挽歌においては非伝
統的で比類のない主題を開拓し、その成立に中国における「哀」の
文体、子を哀傷する詩賦の影響を考えるべきとの見解を示すとも

に、長歌の前半の明から後半の暗への展開について『文心彫龍』の
「誄碑」に「体を伝にして文を頌にし、始を采めて終を哀しむ」と
述べる哀誄の構成と軌を一にすると説く。

しかし、この長歌の構成と内容を願文の一種である「亡文」と比
較してみると、両者の間に多くの共通点が見られるので、右記諸説
に見直しの余地が出てくる。以下、例を掲げよう。

(2) 「亡文」例

〈例1〉

毎聞朝花一落、終無反樹之期。細雨辭天、豈有帰雲之路。……
惟孩子鳳鶴俊骨、天降異靈。弄影巡床、多般語笑。解行而二歩
五歩、解父母之愁容。学語而一言兩白、別尊卑之顔色。將為
(謂)或人長大、侍奉尊親。何期逝水無情、去留有恨。朝風忽
起、吹落庭梅。玉碎荆山、珠沈逝水。父念切切、垂血淚以無休。
母憶惶惶、但哀號而難止。東西室内、不聞呼父之聲。南北階前、
空是(見)聚□(塵)之處。親因(姻)念想、再睹何期。内外
含酸、慘傷無盡。惟孩子將齋僧功德、用資魂路。

(亡文範本等・願文號頭・55639)

〈例2〉

嘗聞荆山有玉、大海明珠。骨秀神清、紅顏紺白。似笑似語、解父母之愁容。或坐或行、遣傍人之愛美。掌擎来(未)足、怜念偏深。弄抱懷中、喜愛無盡。或是西方化生之子、或從六欲天来。暫時影現、限滿還歸淨土。何期花開值雪、吐藥逢霜。我邇(俄爾)、之間、掩(奄)從風燭。東西室內、不聞呼母之聲。南北堂前、空見聚塵之跡。懸情永隔、再會難期。玉貌榮榮、託坐何路。則有齋主敬為亡孩子ム七齋有是設也。惟孩子化生玉殿、遊戲金台。不歷三塗、無為八難。捨閻浮之短壽、睹淨土已(以)長生。捨有漏之形軀、證菩提之妙果。

〔亡文範本等〕・願文號頭・S5637)

〈例3〉

昔者素王所歎苗而者於不秀、唯有項茲早亡。秀而者於不實、只歎顔回之少夭。已祐方今、然不殊善者、孩子之肌明片玉、目淨瓊珠。頰桃李之花開、眉彎彎海月初曲。能行三步五步、起坐未分。學語一言兩言、尊比(妣)未辯(辨)。豈謂鳳鸞無託、先凋五色之花。龍駒未便、先懼(摧)千里之是(足)。慈母曰悲、沈掌上之珍。敵霜、失帳中之玉。飾展薰修、用薦孩子冥路。

〔願文等範本〕・夫亡・S2832)

*この亡文は、〔願文等範本〕「夫亡」条に見え、前半が亡き夫へ捧げる文、後半が亡き子へ捧げる文となっており、抄録過程における誤写

と見られる。(筆者注)

〈例4〉

惟孩子稟乾坤而為質、承山岳已(以)作靈。惠和也、而(如)春花秀林。聰敏也、則秋霜並操。將謂宗枝永茂、冠蓋重榮。豈期珠欲圓而忽碎、花正芳而□(凌)霜。致使聚沙之處、命伴無聲。桃李園中、招花絕影。或者池邊救蟻、或者林下聚沙。遊戲尋常、不逾咫尺。豈謂春芳花果、橫被霜霰之凋。掌上明珠、忽碎虎□之口。嗟孩子八歲之容華、變作九泉之灰。艷比紅蓮白玉、〔化〕作荒交(郊)之土。

〔願文等範本〕・妹三(亡)日・S2832)

(3) 語句の出典

(a) 白玉の我が子古日は明星の……夕星の……
先ず、井村氏による一句の現代語訳を掲げよう。

生まれた出た 真珠のような

夫婦の宝 わたしの古日!

明星が またたく朝は

床の側に いつもつききり

……夕星が またたく 宵は……

『萬葉集』には、「朝には、夕には」との形で表現する歌が多数あるが、「明星の朝……夕星の夕……」はこの一例だけである。「明星」も『萬葉集』にはこの一例のみ、「夕星」はこの例を含めて僅か三つということから、両者の併用は、異常なケースと見なさねばならない。井村氏もこの異例に気づき、「親子の情愛の日々を象徴する美しい枕詞」「明の明星、宵の明星は、何よりも愛と幸福の日々の美しいシンボルであろう」との解釈を施しているが、注目したいのは、『敦煌願文集』には、子供の誕生一ヶ月を祝う願文に次の文句が並べられている、

其孩子乃色奪紅蓮、面開圓鏡。眉寫殘月、日(目)帶初星。容貌分暉、敢映瓊瑤之色。(願文範本・孩子・P2044)

文中の「眉寫殘月、日(目)帶初星」は、親の目に映る子供の容貌の美しさを描くもので、「眉は殘月(三日月)のように美しく、目は初星のように明るい」との意である。この長歌における「明星」「夕星」の併用は、或いは願文の対句に倣った、「朝夕」と「わが子の美しい容貌」をかけた枕詞と見られよう。「殘月」と「夕星」こそ一致しないものの、「初星」も「明星」も『毛詩』にいう「啓明」の星である。

(b) 床の辺去らず立てれども居れどもともに戯れ
一見ありふれた表現に見えるこの一句は、前引願文例1と例4にある、

○弄影巡床。

○遊戯尋常、不逾咫尺。

の翻案と見なされよう。現代風に訳せば、「床の辺をまわつて離れない」、「遊ぶ時もじつとしている時も、一歩も身辺から離れない」となる。二例は、可愛げで、愛憐の情を誘う子供の姿を詠うこの一句の発想に影響を及ぼしたのである。

(c) 大船の思ひ頼むに……思はぬに横しま風の尔布敷可尔覆
ひ来ぬれば

「横しま風」の典故を佛典「横風」(『佛說七処三觀經』)、「邪風」(『続高僧傳』卷十五、僧弁傳)、「無常風」(『付法藏因緣傳』卷二)とすべきとの見解もあるが(芳賀『萬葉集における中国文学の受容』、願文にも例えば、

○朝風忽起、吹落庭梅。(例1)

○我邇（俄爾）、之間、掩（奄）從風燭。（例2）

○何期忽翻浪以傾舟、俄庭風而滅燭。

（〈亡文範本等〉・亡考妣意・S5639）

との表現が見られる。右三例は、それぞれ「わが子が」俄か風によつて吹き飛ばされた朝の梅のようだ」「わが子が」俄か風によつて消されて消えた蠟燭の火のようだ」「わが母は」突然の大波に覆された船、俄か風によつて消された蠟燭の火のようだ」の意になる。類似のような表現が他の願文にも多数見られる。

○豈期業韻（運）難停、忽奄（掩）風燭。

（〈亡妣文〉・甲卷S343 乙卷P2915）

○奄從風燭。

（〈武言亡男女文〉・S343）

○何期大夜忽臨、掩（奄）從風燭。

（〈亡文範本等〉・S5639）

○何圖玉樹先彫（凋）、金枝早折。奄從風燭、某七今臨。

（〈亡男〉・S1441 P3825）

○豈期風燭難留、掩（奄）歸大夜。

（〈願文範本等〉・亡文・S343 P3259）

○何期風燭不停、奄絳某七。

（〈發願文範本〉・P2058）

さて、表題の句に見える難訓語「尔布敷可尔」をめぐって諸説あ

るが、右記諸例に照らして、「にわかに」と訓む説に従いたい。西本願寺本では、その表記が「尔母布敷可尔」となっており、『略解』所引宣長説、下四字を衍字とし、尔母は位置が乱れて上に入ったものとし、布敷は「尔波」の誤りとみて「尔波可尔母」としている。これに『古義』、『新講』、金子氏『評釈』が従う。井上通泰『萬葉集新考』も、下四字を衍字とし、母を「波」の誤り、敷可を衍字として、「尔波布尔」と訓み、ニハカニの意としているのである。

右記の論考を踏まえて、一句については、「思わぬに」は「豈期」「何圖」「何期」の訓読語、「横しま風の尔布敷可尔」は、「横しま風の、俄に」と訓まれ、「覆ひ来れば」は、右記〈亡妣文〉の「忽奄（掩）風燭」の「掩」——おおう、の訓読語とされよう。一句の大意を「大船に横しま風が俄に覆い被さってきたように」と解したい。大波によつて覆される船という譬えは、右記の「何期忽翻浪以傾舟、俄庭風而滅燭」に触発された表現であろう。

(d) 立ち踊り足すり叫び伏し仰ぎ胸うち嘆き

一文については、『風土記』（意字郡）に見える、「号天踊地行吟居嘆」を、「成踊」「儀礼・土喪礼・既夕礼」、「哭踊」「礼記・檀弓上・問喪」等の「踊」と交渉を持つ語と見る説がある。「立ち踊り」「胸うち嘆き」の句は、契沖が『孝経』（喪親章）を引いて指摘

する、「擗踊」を下に敷いたものということになる。

立ヲドリヨリムネウチナゲキマデハ孝経云。哭泣擗踊哀以送。

注曰、擗心曰擗跳曰踊。所以泄哀。男踊女擗以送之。

〔代匠記〕精撰本)

岸本由豆流『萬葉集攷証』でも、『礼記』(檀弓下)の、

辟踊、哀之至也。有算、為之節文也。

をあげている。これに『新日本古典文学大系・萬葉集』も従うが、⁽¹⁹⁾左記の例について見よう。

○至孝等對孤墳而蹠踊、淚下數行。扣棺槨以號咷。

〈廻向發願範本等〉・嘆墮・S4474)

○至孝攀號擗勇(蹠)、五内分崩。

〈臨墮文〉・S6417)

○遂乃攀號擗(擗)踊、五内分崩。

〈臨墮文〉・S6417)

○至孝等攀號擗踊……悲叫號咷。

〈臨墮文〉・北圖7133)

○遂乃攀號擗踊……悲叫號咷。

〈臨墮文〉・S5957)

一読して表題句と至近の距離にあることが判るであろう。ただし、

本来は亡き親への行為として臨墮文に多く見られる表現であり、子供
の亡文にあまり見られないものであるが、憶良によって長歌に取り
入れられ、自家葉籠中にて合成したものであろう。

(e) 白玉の我が子……手に持てる我が子飛ばしつ

右記表現の依拠として、「痛掌珠愛子」(江淹「傷愛子賦」『弘明
集』)や「掌中珠碎」(庾信「傷心賦」『芸文類聚』)を指摘されてい
るが、夭折した子供に贈る願文には、前引諸例を含めて、左記のよ
うに多くの類例が見られる。

○玉碎荆山、珠沈逝水。(例1)

○荆山有玉、大海明珠。(例2)

○掌擎来(未)足、怜念偏深。(例2)

○慈母日悲、沈掌上之珍。(例3)

○豈期珠欲圓而忽碎。(例4)

○掌上明珠、忽碎虎口之口。(例4)

○每泣蟾光之影、猶掌失珠。

〈二月八日文範本〉・亡男・甲卷S1441'乙卷P3825)

○膝下亡珠、掌中碎寶。

〈亡男文〉・P2341)

○豈謂庭摧玉樹、掌碎明珠。

〈亡考妣文範本等〉・孩子歎・S5637)

○豈謂庭摧玉樹、掌碎明珠。(願文範本等)・□□子・S4992)

○豈期風摧澤葉、霜折芳苗。碎掌内之明珠、失窈窕之美色。

(亡文)考妣文範本等)・女孩子・S537)

○片玉掌上、月淨驪珠。(願文範本)・女・P2044)

○母泣断而无追、痛失掌中之寶。(願文範本)・孩子・P2044)

このように、我が子を「掌」にある「珠」、或いは「玉」と比喻するところが、「白玉の我が子」「手に持てる我が児」の表現に通じており、右記願文の諸例こそその出典として再認識されるべきであろう。とりわけ、表題の句が表現しようとする意味が、右記「亡男」「孩子」に見える「猶掌失珠」「痛失掌中之寶」―「掌の珠を失うが猶し」「掌中の寶を痛失す」に尽されている。

(f) いっしかも人となり出でて悪しけくも善けくも見むと大船の思ひ頼むに

一句は、「いつの日か大きくなってあれこれと見てやれようかと心頼みにしていた矢先」と現代語訳されているが、前引「亡文」例1にある、

将為(謂)或人長大、侍奉尊親。

とともに、「亡き子の将来への期待という点において軌を一にする。ただし、「亡文」の方は、「成人して両親の面倒が見れたら」と、所謂儒教の孝行観を盛り込まれたのに対して、長歌の方は、ただ親子の成長を見届けてやりたいとの意味になっている。これは日本的に変容させられたものかどうか後考が必要であるが、表現のモチーフは近いものと見られる。

(g) 若ければ道行き知らじ賂はせむ下への使負ひて通らせ

反歌となる右の歌における「道行き」は、後生来世までの彷徨、つまり中有の旅を指すものである。四十九日の間、閻羅王その他冥府の王の審判を受けながら旅を続ける。ここに出てくる「賂」は、死者の追善供養のために三宝に捧げる布施を指し、もって天へ導くことを祈願する。

○惟孩子将齋僧功德、用資魂路。(例1)

○則有齋主敬为亡孩子ム七齋有是設也。(例2)

○飾展薰修、用薦孩子冥路。(例3)

そもそも結びの文句として「用資魂路」「薦孩子冥路」が用いられているが、反歌の機能もこれに近い。両者相俟って願文＝亡文の機能を果たしていると言える。

(4) 「亡文長歌」出現の意義―長歌成立の一側面

以上、「男子名は古日に恋ふる歌」の表現と「亡文」の類似を分析し、関連の可能性について考察してみた。片や漢文、片や和歌という、一見形態を異にする二つの文章が、実は憶良一流の翻案手際によって結ばれた者同士である。かつて井村氏はこの一首を評して、

憶良の作品は一般に、黙読したり、平板に棒読みすると、ずい分ぎこちないものがあるようであるが、その情念の浪に乗るよ
うに朗読してみると、緩急・強弱・抑揚が豊かで、案外スムーズな詞運び、内在的な韻律が有ることに気付く。

と語ったが、前項の出典考察に見たように、四六駢儷文の願文を下敷きとする漢文韻文の熟読があつたからこそ、このような「スムーズな詞運び、内在的な韻律」を有する「亡文長歌」とも言うべきものが作り出されたのであろう。

さて、願文を踏まえてできた、このような「亡文長歌」は、上代における長歌成立を考える点においても新たな視点を提供してくれるようである。

日野龍夫氏は、「新体詩の源流―漢詩和訳のもたらしたもの」なる一文において、近代における新体詩の確立には、漢学者たちに

よる中国の漢詩の和訳が一役買っているという、従来の定説を覆す創見を打ち出されている。日野氏は、近代詩の源流を求めるとあり、与謝蕪村の長詩「北寿老仙をいたむ」に注目し、「形式、内容ともに、例えば島崎藤村の『若菜集』に収めてもそのまま通りそう
なほど、近代的な抒情詩に接近している」と評しながら、その達成を、頼原退蔵が指摘する俳諧の世界に伝わる長詩の流れとの関連をあえて否定し、「漢詩の悼亡詩を日本語で試みるという意図のもたらしたものと」した上で、

人の死を悲しみ悼む詩は、日本でも、古今和歌集以来、歌集に哀傷の部を設ける習慣が固定し、古来無数に詠まれてきた。しかし、岡に登って人の死を悼む、あるいは人の死を悼むために岡に登るという設定は、日本の哀傷歌の伝統の中には多分例がない。……「君を思うて岡のべに行きつ遊ぶ／おかのべ何ぞか
くかなしき」という聯は、まさにこの漢詩の悼亡詩に見出される登高感傷の思いを、日本語の詩として表したものと考えられる。そして、この聯に続く叙述は、登高して目にした野草、耳にした雉の声と、次々と思いを及ぼしてゆくのであるから、
「北寿老仙をいたむ」全編は登高感傷の思いを順次展開するところになり立っていると思う。

と論じ、「漢詩の和訳は日本文学の欠を補っているのである」との結論を示されている。⁽²⁰⁾

「恋男子名古日歌」という長歌の成立に関しても、本質的には同様のことが言えよう。「亡文」という文体が持つ構成は、弔われる者の生前と死後へ寄せる文字通り「情念の浪」を綴ったものであり、それが憶良の翻案作業を経て、初めてそれまでの和歌に類を見ない「亡児哀傷」や「死児哀傷」と言われるような「思いを順次展開」した、「内在的な韻律」を有する長歌が生まれたのであろう。

凡そ新しい文体、新しい詩想の創出には、常に時代の気運とそれに呼応する文学者の情熱が欠かせないものである。日本文学の場合、「翻訳」と「翻案」がとりわけ常に時代の先取りとして、気風を切り開いていくのが特徴だったように思われる。近体詩が、漢詩和訳でもって西洋文学の受容の礎を築いたと同様、「恋男子名古日歌」のような「亡文長歌」の成立の背後にも、敦煌願文のような漢詩文の翻案という一面があったことを、右の論考をもって証としたい。

五、むすび

以上、憶良の作品三点における敦煌願文の影響についてごく初歩的な論考を行ってきた。『敦煌願文集』所収の願文は、未刊行の分と合わせればその半分程度のみということで、本格的な研究調査はまさにこれからであるが、小稿を通して窺えたのは、願文という新

たな漢籍の一群の萬葉研究にとつての重要性と、従来の我々が想像する以上の、憶良の多彩な文筆活動及び述作環境である。

今後刊行される予定の『敦煌願文集』続編をも視野に入れて、出典調査に加え、細かい表現の一つ一つについて、より緻密な考証を重ねながら新説を生み出していくのが、萬葉研究の一つの新しい方向であろう。

筆者としては、かかる多彩な願文の翻案と見なされる述作が何故憶良に集中していたのか、その背後にあった上代における願文の流布及び利用の状況、ひいては信仰形態はいかなるものであったのかといった問題についても、深い関心を覚えるものである。こうした問題を順次解いていくことよって、印象批評を超えた、より真実に近い憶良像に迫りうるであろう。

注

- (1) 願文の定義については、山本真吾『平安鎌倉時代に於ける表白・願文の文体の研究』(汲古書院、二〇〇六年)に種々集められており、中でも渡辺秀夫「願文—平安朝の追善願文を中心に—」(佛教文学講座第八巻『唱導の文学』勉誠社、一九九五年)が最も概括的である。なお、黄征「敦煌願文考論」『香港敦煌吐魯番研究中心叢刊之六・敦煌語文叢説』(台北新文豐出版公司、一九九七年)や、饒宗頤「談佛教的發願文」『香港敦煌吐魯番研究』第四巻(一九九九年)にも、「願文」の定義に関する議論があり、併せて参

考されたい。

- (2) 黄徴・呉偉編校『敦煌願文集』(岳麓書社、一九九五年) 参照。上代文学とりわけ『萬葉集』との関係を研究する必要性を強調したのが、芳賀紀雄「願文・書儀の受容―海東と西域の問題」(『萬葉集における中国文学の受容』(塙書房、二〇〇三年) である。
- (3) 王暁平氏は、その著『人文日本新書・遠傳的衣鉢―日本傳衍的敦煌佛敎文学』(寧夏人民出版社、二〇〇五年) において、正倉院文書を始め、『萬葉集』や『源氏物語』などの古典における願文の影響について一通り論じている。憶良との関連について、主として「報凶問歌一首」の漢文序、「罷宴歌」及び「恋男子名古日歌」との文体または一部表現の類似を指摘している。王氏の関連研究は、外にも、「東亜願文考」『敦煌研究』(二〇〇二年第五号へ総第七五期) 九五―一〇〇頁、「晋唐願文與日本奈良時代の佛敎文学」『東北亜論壇』(二〇〇三年第二号) 八八―九二頁、「敦煌書儀與『萬葉集』書状的比較研究」『敦煌研究』(二〇〇四年第八号へ総第八八期) 七六―八〇頁、がある。
- (4) 小島憲之「山上憶良の述作」『上代日本文学と中国文学』(中) (塙書房、一九六四年) 九八―一九八三頁
- (5) 中西進「山上憶良」(河出書房新社、一九七三年)
- (6) 芳賀紀雄「萬葉集における中国文学の受容」(塙書房、二〇〇三年)。以下、芳賀氏の論説はすべてこの書によるものとする。
- (7) 佐藤美知子『萬葉集と中国文学受容の世界』(塙書房、二〇〇二年)
- (8) 井村哲夫『萬葉集全注』巻第五(有斐閣、一九八四年)。以下、特に断らない限り、井村氏の論説は、すべてこの書によるものとする。
- (9) 井村哲夫『萬葉集全注』(注(8))、同「萬葉びとの祈り―現世安穩・後生善処」『憶良・虫麻呂と天平歌壇』(翰林書房、一九九七年)
- (10) 小島憲之『上代の文学』(有斐閣選書 日本文学史1) (有斐閣、一九七六年)
- (11) 村山出「山上憶良の研究」(桜楓社、一九七六年)
- (12) 中西進「山上憶良」(河出書房新社、一九七三年)
- (13) 井村哲夫「沈痾自哀文」『セミナー 萬葉の歌人と作品』第五卷(和泉書院、二〇〇〇年) 一九七―二〇八頁
- (14) 小島憲之・木下正俊・東野治之校注『日本古典文学全集・萬葉集』(小学館、一九九四年)
- (15) 『敦煌願文集』の編集者黄徴氏は、「敦煌願文統雑考」なる論文において、願文の題にしばしば見られる「呪」「咒」「祝」等の表現の異同を佛敎祈禱方式の相異において考察したことがある。「自哀文」の意味を考えるにあたり参考となる。『敦煌学研究叢書―敦煌語言文字学研究』(甘肅教育出版社、二〇〇二年) 二〇三―二二一頁
- (16) 余欣「思遠道―為行人祈福的各種方式」『神道人心―唐宋之際敦煌民生宗教社会史研究』(中華書局、二〇〇六年) 三四六―三五四頁
- (17) 一首をめぐる諸家の説を概括して述べたものに、村山出「男子名は古日に恋ふる歌」『セミナー 萬葉の歌人と作品』第五卷(和

泉書院、二〇〇〇年）がある。二三六―二四四頁

(18) 『萬葉集』には、「朝夕」をめぐる表現は例えば左記のように数多く見られる。

○朝には 取り撫でたまひ 夕には い寄り立たしし……(卷一・3)

○朝には 出で立ち偲び 夕には 入りゐ嘆かひ……(卷三・481)

○朝には 庭に出立ち 夕には 床打ち払い……(卷八・1629)

○朝には 白露置き 夕には 霞たなびく……(卷十三・321)

○朝には 角に出で立ち 夕には 谷を見渡し……(卷十九・4209)

(19) 佐竹昭広他校注『新日本古典文学大系・萬葉集』(岩波書店、一九九九年)

(20) 日野龍夫「新体詩の源流―漢詩和訳のもたらしたもので―」『国語国文』第七二卷第三号、二〇〇三年三月 九五―一九七九頁

【付記】小稿をもって筆者を萬葉研究に導き、数々の萬葉ゆかりの地へ同行させていただいた井村哲夫先生に感謝を申し上げます。